

CLINICAL CONFERENCE

症例から学ぶ 上部消化器疾患

連載

第21回

Esophageal Rosetteを認めた 食道アカラジアの1例

中藤流以 春間 賢* 眞部紀明**
平井伸典 塩谷昭子

川崎医科大学消化管内科

同 科, 川崎医療福祉大学*

同 科 内視鏡・超音波センター**

はじめに

食道アカラジアは嚥下困難を主訴とする食道の機能異常症であり、下部食道括約筋 (lower esophageal sphincter : LES) の弛緩不全と食道体部の収縮運動が障害される疾患である。診断に至る特徴的な所見は、食道造影検査で食物残差を認める拡張した食道と、胃入口部の食道は鳥の嘴様に先細り、造影剤の停滞を認めることである。しかしながら、最近では消化管の造影検査を行う機会が減少しており、上部消化管内視鏡検査が診断の中心となっていることが多い。岩切らは、食道アカラジアの特徴的内視鏡所見として、深吸気時に認められる全周性の放射状のひだ像を食道ロゼット (Esophageal Rosette) として報告している。

今回、内視鏡検査で典型的な食道ロゼットを認めた食道アカラジア症例を経験したので報告する。